

〔やきものの美展によせて〕

## ベトナムの「青花牡丹文大鉢」と オランダの「色絵花鳥文八角壺」について

「やきものの美—朝鮮・東南アジア・中近東・欧州—」に出陳する作品の中から、表題の2点を選び、その概略を説明させていただきます。

「青花牡丹文大鉢」(カット左)はベトナム(安南)の15世紀の作品です。ベトナムにおける青花(染付)磁器の起源は14世紀代と言われており、トルコ・イスタンブールのトプカピ宮殿に伝わっている有名な、大和8年(1450)銘の「青花天宮瓶」はそのモニュメンタルな作品です。ベトナムの初期青花磁器は中国・元時代の青花磁器の影響を強く反映していますが、ベトナムの陶石の性質上、釉薬を施す前に、白土を化粧掛けとして下地に塗っているものが多いことが一つの特徴です。従って、釉薬が剝離したり、青花文様が拡散して滲んだようになったものが多く見受けられます。

この大鉢は、前記の「青花天宮瓶」と制作期をほぼ同じくする、初期青花の稀にみる名品です。良質な呉須を用いて、器の内外に牡丹・蓮華などの主文様を、ベトナム特有の蓮弁帯で飾って、元時代の青花文様風に精緻に描写しています。呉須の発色は紫色がかった鮮やかな青色ですが、これは中国・

明時代前期末から中期、すなわち宣徳後の正統から成化・弘治年間に至る時期の青料と共通していません。料理を盛る器として宮中で使用されたものと思われます。

「色絵花鳥文八角瓶」(カット右)は本来蓋を伴ったものですが、18世紀初期にオランダのデルフト窯で作られた〈グラン・フェ〉と呼ばれる錫釉陶器です。八角形の器面全体に花鳥文様が赤・青・緑の三色で鮮やかに描かれていますが、この文様は中国・清時代の康熙年間(1662~1722)の色絵磁器の文様を模したものです。ここには、1602年に設立されたオランダ東印度会社が盛んに輸入して、一般大衆にまで人気の高かった中国や日本の青花磁器、あるいは色絵磁器の影響のあとが示されています。当時デルフト窯ではこのような蓋付壺や瓶が、大きな食器棚用に3点・5点・7点など奇数のセットで大量に作られました。

錫釉陶器は白い陶土に失透性の錫釉をかけ、その釉上に絵付を施してから摂氏900度位で焼成したものです。この技法はイタリアから南ネーデルランド(現在のベルギー)に伝わり、16世紀初めにデルフト窯でも始められたと言われています。(吉田宏志)

青花牡丹文大鉢 高21.0cm



色絵花鳥文八角壺 高24.0cm



季刊 美のたより No.113

平成7年11月10日

発行 大和文華館